

## 救急救命士が活躍する 救急車の車内



普段なかなか目にする機会のない救急車の車内。今回は患者室の装備とその機能についてご紹介します。

### 患者監視モニター

心電図・血圧・血中酸素飽和度・呼気中のCO<sub>2</sub>濃度などが測定できます。

### 吸引器

口腔内および鼻腔内の嘔吐物、分泌物を吸引します。設定吸引圧になると自動停止する機能を備えています。

### AED

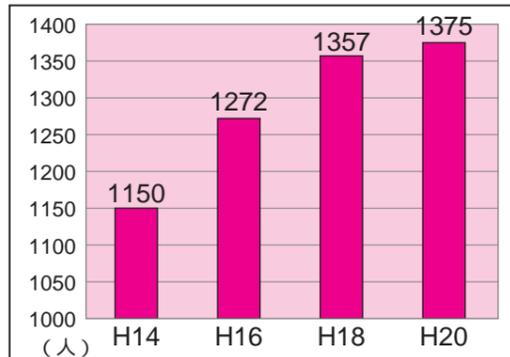
心臓がけいれんしているときに電気ショックを与える機器です。

### 人工呼吸器

呼吸停止時に使用する携帯型人工呼吸器です。

### ストレッチャー

ここに患者を乗せて搬送します。高さや背もたれの角度を変えることができます。



病院への搬送者数の推移

**加東市の救急救命体制**  
加東市消防本部には3台の救急車（消防本部2台、東条分署1台）と48人の救急救命士（うち救急救命士18人）が配置されており、市民のみならずの生命を守るため、昼夜を問わず緊急出動に備えています。緊急通報を受けてから現場まで、平均すると約7分で到着しています。このような通常の救急救命業務の他にも、市内のAED設置事業所向けにAEDリーダー研修会を行うなど、さまざまな講習会を通じて救急救命技術の普及向上に努めています。また、消防と病院との連携強化を図るため、看護師の救急車同乗講習を実施するなど、新しい取り組みも進めています。

### 本当に救急車が必要ですか？

### 救急車の適正利用にご協力を

#### 【誤った救急車の使用例】

風邪、歯痛、検査など緊急を要しない場合の利用  
自家用車やタクシーなどの代わりとしての利用 など



#### 【救急車の要請が必要な例】

呼びかけても反応が無い、または意識がない  
苦しそうな息をしている、または息をしていない  
激しい頭痛、胸痛、腹痛  
交通事故などによる緊急を要するケガ など

判断に迷う場合は、救急車を要請するようにしてください。

問い合わせ 加東市消防本部 ☎42-0119

**救急車の利用にあたって**  
左上のグラフにあるとおり、近年、病院への搬送者数は増加を続けています。そしてその中には、入院を必要としない軽症者や、救急搬送を必要としないような患者も多数含まれていきます。  
加東市消防本部では、平成20年中に1375人を救急車で病院に搬送しましたが、そのうち入院を必要としない軽症者が719人（52・3%）と、全体の半分以上を占めていました。

救急車が適正な目的以外で用されることにより、本当に救急車を必要とされる方の救命活動に支障をきたすことになりかねません。緊急通報する時には、本当に救急車が必要な状況なのかどうか、もう一度考えてみてください。  
救急車は大切な生命を守る私たちの共有財産です。一人ひとりがマナーを守って正しい利用を心がけましょう。



# ～ 救急医療の最前線を担う～ 新型救急車を導入しました

加東市消防本部では、このたび救急車1台を更新しました。新しい救急車は、従来の型に比べて室内空間も広く、最新の器材を備えているため、より円滑な救急活動が可能となります。今回はこの新型救急車、救急救命士の業務、加東市の救急救命体制についてご紹介します。

### 新型救急車のご紹介

今回導入された新しい救急車は、市販のワゴン車をベースに10人乗りの車両を7人乗りに改造することで室内空間を確保したり、車体安定性向上のためにサスペンションを最適化するなど、さまざまな改良が加えられています。

車内には、AED（自動体外式除細動器）、心電図モニター、人工呼吸器、電動式吸引器、輸液ポンプ、患者監視モニターなどの医療機器が搭載されており、病院への搬送中にも救急救命士による的確な応急処置を行うことが可能です。

新型救急車の大きな特徴は、室内空間の広さにあります。これまで救急救命士が中腰で作業をしなければならなかったのですが、新型では十分な室内の高さが確保されているため、立つまま作業ができるようになりました。また、ストレッチャー横のスペースも広くなり、複

数の救急救命士がスムーズに治療を行うことが可能になりました。これらにより、これまで以上に正確で効率的な救命処置が行えるようになりました。

### 救急救命士の業務

救急救命士は、急病、事故などが発生した場合に現場へ駆けつけ、現場や救急車内において医師の指示のもと、患者に適切な医療処置を行いながら医療機関に搬送します。

一般の救急救命士は血圧の測定、心音・呼吸音の聴取、心電計の使用による心拍動の観察などの処置を行うことができます。救急救命士の資格を持つ救急救命士は、それらに加えてAEDによる電気ショック、気管挿管チューブなどによる気道確保、静脈路確保による点滴、アドレナリン投与など、より高度な医療行為が可能で、まさしく救急救命のスペシャリストと言えるでしょう。



いざという時のために日頃の訓練は欠かせません。